

## 機械作用と身體の個性 (中)

大西友太

## 七

私は前三節で數の一般概念から運動及び物質について考へて見たから、是れから元素及び單子の内面的構造について考へて見たらと思ふ。これには今少し前に述べた所を深めて往く必要がある。nを無限大とするときは  $1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{2^2} + \dots + \frac{1}{2^n} = 2$  なる方程式を得られる。この場合に於ける  $1 + \frac{1}{2^n}$  が微分であることは勿論である。

このnといふ數字が無限大である限り  $1 + \frac{1}{2^n}$  が無限小であるべきは斷るまでもないところであるが、この有理數の無限小に於て連續に達するかといふに然うではない無限小である限り、この數概念では如何なる有理數の間にもなほ他の有理數が存在し得る譯であるから、この微分概念では連續といふことはまだ承認されぬ。随つてこの有理數には全體的統一といふことはない。相隣れる二つの有理數の中間にな

ほ他の有理数の竄入し得べき空間があるといふことは、この有理数では結局數概念上田邊博士もいはれて居るやうにその數系列が未だ全體の統一に達せぬといふこととでなければならぬのであつて、有理數の範圍内では如何にその分割作用を進めてもその數概念が數系列の生産の基たる直觀の統一と全然一致することはなく、理論としてなほ兩者の間に懸隔を存するものといはねばならぬ。こゝに於てかこの數系列が直觀の全體に達して、數の本質的概念構成を得られるについては、残れる事實として只この無限分割の可能であるといふ事實その物の内面に全體の系列を求めねばならぬのであつて、是れが私の前に $\frac{1}{2^n}$ を更に $n$ 分したるものを考へたる所以であり、無限分割の内面に更に無限分割を試みた所以である。數學では有理數の内面的根源に無理數の連續的全體が考へられねばならぬ所以がこゝにあるのであつて、實數系列はこの點に於て無理數の内面的連續的全體の上に成立するものといつてよい。

數の完全なる連續では、全體が點の集合といふよりも點の中に全體があるのであつて、數には如何に分割を續けてもなほ分割し切れない全體が $n$ の微分の内面に $\epsilon$ として残つて居る。

この  $dx$  の全體から見るときは數は數學上の言葉でいふならば實無限として初めて本來的意味に於て體系が可能である。數はその根本的系列に於てこの内面的全體に收斂され、この全體から發展するといふ意味に於て一つの統一的體系を作る。この考を追窮すると色々の數の體系は、一つの唯一的根源と見らるべき直觀的全體の内面的無限體系の異なる寫象 *Abbildung* とも見られる様になる。同じ次元の系列の數はその根源の内面的生産體系の寫象であつて、その根源に於ては色々の數體系は凡て相似の體系をもつて無限に異なる個別的系列であるといふのが普通の數學であるが、私はこの全體の根源に溯る點に於て異なる次元の數系列も矢張り一つの相似的體系としての全體が一つの體系を作るものといつてよいと思ふ、このやうにして私は無限の全體の數系列を、その唯一の極限に於て見た内面的原體系がデ、キントの「自分の思想世界」といへるものであらうと思ふ。<sup>(一)</sup> 氏の自分の思想世界は凡ての數體系の統一的原體系であつて、この原體では多くの數系列の極限が重り合つて一つの點となつて居る。随つてこゝでは一つの點の内面的世界の中に平面もあれば立體もあり、直線もあれば曲線もある、色を示すべき函數系列と形を示すべき函數系列とが一つの内面的點の中に相重つて一體系となつて居る。數の内面的

一根源に於てこれ等の數系列の極限は一統一體系となつて居る。

數は一つの獨立の世界であつて、その内面に色々の系列の要素を含んで居るといへる。

デ、キントの自分の思想世界は、それ自身の中に色々の數系列の極限をもつ點に於て、正にこれ等の數系列の目的といへるであらう。點が線の終りではなく、その初めであつて、點の中に線の方角を含んで居るといつたやうに(二)この思想世界の中に凡ての數系列を含み、カントルの秩序型 Ordnungstypus のともいはるべきものとなつて居る(三)正に凡ての數系列の内面的統一體系であるが、このデ、キントの自分の思想世界では數の原體系であるといふ點に於て、その背面に時間の豫料としての無限の多を同時的直觀の下に統一する立場をもつて居らねばならぬ。總合的普遍の立場から普遍の特殊との關係を一舉俯瞰的に直觀し、超時間的に直觀の内面に於て凡ての數關係を作るのが、この自分の思想世界の内面的特徴である。

私は分析の極限に於ける  $dx$  に元素の内面的本質を求めねばならぬ。現在の立場としては、この點について研究を進めねばならぬが、一體時間の多を豫想し、これを統一して一つの *Zusammenschluss* とするのが既に述べたる如く空間の特色である。時

間は空間を待つて初めて今といふことが可能であり、随つて又過去及び未來といふことも可能である。時間のみでは只多といふ果しもない轉化があるのみであるが、この果しのない轉化の多が統一の内容を作るのは空間を待つからである(四)直觀が發展であると同時に統一を得るのは、時間が空間を豫想し、空間の統一に於て時間の豫料的發展の多が各階段毎に全體の統一として客觀化せられるからであつて、對象の統一といふことは全く時間に對する空間の全體の直觀の力にまたねばならぬ。この點に於て空間を時間に解體した時間の根柢に於て豫想さるべき空間、即ち凡ての意味に於て時間を超越し、現象學的時間をすら超越した叡知的空間は統一的存在に最も注意すべき問題でなければならぬのであつて、若しデ、キントの自分の思想世界が數系列の原體系として凡ての系列を根本的に統一し發生するものであるならば、結局この叡知的空間に係るものでなければならぬ。この空間に基けるものとして叡知的直觀によつて全體が同時的に實在するところに、デ、キントの數の原體系が承認せられるのみである。

微分の内面的根柢にはかゝる全體がある。この全體の構造を明かにすることは元素の研究の目的である。物理學では特殊の現象に對する規範と見做さるべき一

般關係を發見せねばならぬ。随つて分析がその根本方法とならねばならぬが、一般にこの分析を以て一般特殊に對する抽象的一般發見に終るものと考へて居る。併し是れは皮相の見である。分析といふことは具體的全體を豫想し、その發見を以て終るものである。分析されるといふことは、實は部分が全體中に於て獨立の存在を有するといふことを豫想する。例へば水が酸素と水素とから成り立つといへば、分析によつて水の要素を明かにすることであるが、分析されたこの二要素の性質を考へて見ると、この要素が結合して水を造るについては酸素の水素に對する働きの、水素の酸素に對する働きの二つの働きの一つになり、内面的に結合された。全體の官能がその特殊の水のなかになければならぬ筈である。水を酸素と水素との二要素に分析するといふことは、畢り部分の中にこの全體の官能を發見するといふことでなければならぬ。この二要素を更に原子なり電子なりに分析するといふことは、實際は益々小なる一般的要素の中に全體の具體的存在を發見することではなければならぬのであつて、分析の極限たる微分に於ける内面的集合を考ふればこの事實は益々明瞭疑ふべからざるものとなる。一面から見れば分析は次第に内容の簡單なリツカートの所謂單純の統一に接近することであるけれども、この單純の統一の内

面的構造を見るときは、直觀の全體的具體的なるものがあるのであつて、分析は所詮ヘーゲルのいつて居るやうに形式への舉揚でなければならぬ。(五)

存在その物の直接的特質を明かにするのが分析であるが、この分析は質量の内面に於てこれを生ずる最も具體的全體者たる形式その物の直接的承認に達するのみでなく、元來分析可能の比量的悟性の内面に於ては、分析は何時でも直觀的悟性の直接的所與によつて部分の内面に全體の存在すべき豫想をもつて居らねばならぬのである。分析は本來統一の演繹である。

私はこの點から今一度前に述べたリツカートの原子のことを考へて見よう。既に第三節で述べた如く原子の認識を以て認識的人間に與へられたる永久の課題であるといふ考へから、リツカートは非現實的のもの即ち原子の一般的イデヤを承認するから現實的のものが認識されるのであるといふが(六)これには猶ほ一つの根本的假定がある。リツカートの考へは與へられたる經驗の雜多の統一を以て認識と見るカントの哲學から出る考へ方であるけれども、この方法では悟性の認識は概念即ち分析的一般から特殊即ちカントの與へられたる經驗的直觀の雜多に進んでは往くものゝ、只その雜多を説明し得るのみであつて、規定し得るところはない。こ

れを規定し得るには他の悟性に待たねばならぬが、吾々はなほ一つの悟性を考へることが出来る。即ち吾々の悟性の如く比量的でなく直觀的なる悟性を考へることが出来るが、この悟性はその直覺的なる點から、全體から部分に向つて進み、全體の規定された形式を可能ならしめるものである（七）吾々のもつ悟性の比量的認識に於ける分析には、その根柢に於てこの直覺的悟性の全體が横り、分析を内面的に可能ならしむると共に、なほその分析の結果を内面的必然的に結合せしむる。リツカイトの比量的悟性の一般的認識には直覺的悟性の全體が根柢に假定されて居る。これが吾々の原子認識の極限に於ける微分概念、内面的複雑性を承認し、氏のいつた原子の單一の統一概念を根本的に覆へして複雑性の内面的統一を承認せねばならぬ所以であつて、原子の真相は内面的一般の單純性ではなく、内面的全體の具體的複雑性にある。分析といふときは複合體をその構素に分つことであるが、分析される元素は私の知る限りでもロツチェやロイスの外にジエームスやベルグソンなどの人々も考へて居るやうに、部分に先つてそれ／＼その内面に於て獨立の全體をもつて居らねばならぬのである。全體が部分から出來て居るのではなく、部分が全體から出來て居るのであつて、部分の内面には全體が最も具體的なる姿を以て内在して居る。



これが實在の真相であつて、實在の本來では一切の有限的量の多様の體系を作るべき凡ての差異的變化を内面的秩序に於てもつて居る。コーエンのものは最も内容の豊富なる獨立の世界である。純粹なる數はカントルが實無限と考へた點即ち内面的實在に於て正に無限の實在であつて、存在の具體的イデヤを藏して居る。

デ、キントは論理の内面的調和は規定的要素から一つの新しき規定、その要素の何れにもあらざる要素の新體系を作るべきことを信する旨をその著『數は如何なるものか又如何なるものたるべきか』の第三版の序文に於て述べて居るが、この新體系は氏の自分の思想世界の内面に豫想さるべき直觀的全體の規定によつて生ずる自分の思想世界でなければならぬのであつて、この豫想をもつ點に於て氏の自分の思想世界もその豫期通り數の原體系たり得る。背面に全體のある數は自己の内面から多様の系列を發生し得べき一つの獨立世界であつて、その根本系列を含む微分幾何學はミンコフスキの世界幾何學のイデヤとして宇宙の形像を示すに足るものである。

分析の極限たる微分といへば最も内容の單純なるものゝ如くに想像し易いが、この微分こそは唯一の直覺的悟性の全體をその内面に有するものとして無限の實在

であり、自發自展の内的力に充ちたる元素である。常識的に物理現象を見るときは物質及び力なる二元主義の特徴を有する。これに對して相對性原理では只方の場によつてのみ一切の物理現象を説明せんとする希望を有し、且つ今日ではこれを實現して居る。相對性原理の物理學では物質が存在するために場所を要求するのではなく、方の場が物質を生ずるのであるとする。<sup>(八)</sup>こゝに相對性原理の物理學の進歩がある。併し相對性原理はこの力の概念を何處から得るのであるか。ヘルムホルツの要求するメートルの世界の等質性に對して不等質を承認し、ユークリッド・ヘルムホルツのメートルの固定的自然の枠の中に自由に變化するメートル世界をはめることが出来るとするのが一般にリーマン・アインシュタインの考へ方であつて、<sup>(九)</sup>三次元のユークリット幾何學に對して時間空間の相對性のミンコフスキーの力の幾何學を以てするのが今日の相對性原理の根本思想であるが、この原理の見る如く此處と今なる時間空間の相互關係が一つの物理的實在として力の座標たるを得るについては、この「此處と今」なる相互關係の微分的要素の中に、無限量の作用が統一的全體として内在せねばならぬのではないか。超時間的全體がこの「此處と今」なる點の内面にあつて、作用の永久的根源として質量を作る形式となる點に於て力の概念

が物理學上考へられるのである。勿論時空は相對性のものであるが、この相對性に從ひつゝ時間の内面に空間の全體的統一を見作用の根源に無限の力を發見するの  
が相對性原理の問題である。

有限的物質の先驗分析の極限としての微分の「此處と今」なる點は、微分幾何學として數の内面的秩序型であると共に、物理的形像を作るべき無限の *Kontinuum* であつて、數の形式の差異が直ちに物質の差異を示すに足るべきものである。

色の特質を示すに函數方程式を以てするのが數學的自然科學の本來であるべきことは既に述べたが、嚴密なる數學の自發的體系の生成が本來物理的現象の發生を示すべきものであつて、前に述べたワイルが *typisch* に物質を求めたのもその一つであるといへる。この物が一つであるといふことゝ此の物が赤いといふことゝは常識から見るときは非常に違つた見方であるやうであるが、實在の本來では色の赤いといふことも嚴密なる數系列によつて示さるべきものであつて、吾々は寧ろ今日の經驗的物理學に於てこの物が赤いといふ物の屬性を、既にもいつた如く函數方程式によつて示し、同じ色の屬性の差異を係數の差異によつて示すことが出來ない粗雑なる數學的自然科學の知識を悲しく思ふ。數は最も徹底せる意味に於て實在の範

疇である。私はこの點に於て最近の實函數論の認識論上に於ける進歩を認めねばならぬと思ふ。ハーンがその著『實函數論』第一卷の序文に於ていふところによるときは、シエンフリスが獨逸數學協會年報、『點の多様性説の發達』Die Entwicklung der Lehre von den Punktmanigfaltigkeiten の新版にあつて協力すべきことを勧誘せられ、殊に集合論を實函數論に適應する方面を擔當すべきことを勧誘せられたことを述べてあるが、集合論を實函數論に適應して分析の極限たる微分の内面的構造を明かにすることは、今日の數學は勿論數學的自然科學の最も深き興味あることであつて、私のこの小論文に於て参考したる所の數學書も前に述べたるカラテオドリイの『實函數論講義』を初めとして、重にこの方面に傾いて居るのは、この新傾向に従つたからであるが、私の立場から考へて見ると、集合論を實函數論に適應して微分の内面的構造を明かにするにあつては、微分概念に徹底して、結局ヘーゲルが既に述べたるやうに分析を以て形式への擧揚であると考へ、否、なほ進んで統一の演繹であると考へた立場に立つて、合理的に非合理性の内面的構造を明かにせねばならぬ必要がある。随つて今の場合私は微分の内面的構造上に於ける形式と内容との關係から、ライブニッツの單子の内面的構造の研究に進まねばならぬ。よつて私は數學

的ならびに哲學的方法によつて微分の内面的構造から單子の内面的構造の研究へ進みたいと思ふ。先づ以上述べたる數概念を今少しく吟味してからその内面には入つて往かう。

## 八

$\mathcal{Y} = \mathcal{Y}(x)$  に於て前に述べたコーエンの考へるやうな  $x$  は獨立變數であり、 $\mathcal{Y}$  を分布の稠密の集合とすれば  $x$  は内面的にこれに對應する自己内稠密の集合にあたるものであるが、この  $x$  の集合の要素が數として考へらるべき最も根本的なものに觸れ、隨つて最も根本的な系列の意味に於ける線を發展すべき點である。かゝる内面的根本系列の原點が即ち最も簡單に考へられたデ、キントの自分の思想世界である。カントルやハーンなどのいふ abgeschlossene Menge もかゝる根本系列の極限としての内面的集合でなければならぬ。(一〇) 數學ではこれを閉合の集合と譯して居るやうであるが、私は別に哲學の用語例にしたがつて自己完了の集合と譯したいと思ふ。閉合といふのは數の凡ての關係を自己の内面に統一するからであるが、この自己の内面に統一する點に於てこの集合は凡ての數關係を自己の内面にもつて居

る獨立の體系でなければならぬから、私はこの方面から自己完了の集合と譯したいと思ふ。この集合は凡ての數關係を自己の内面的關係に統一する點に於て、凡ての數系列を根本的系列の上に立てる一統一體系たらしめる。點が線の終りでなく、その初めであつて、その中には線の方向を含んで居るといふことはこの内面的高次集合に於ていはれることであつて、この高次の内面的集合に根源する點に於て、凡ての數系列は一義約統一の不可分的全體を作る。吾々はこの高次の内面的自己完了の集合に於て初めて存在の内面的秩序全體を映せるものとしての秩序型を見る。ことが出来る。凡ての數系列の原型としてその性質的差異を一つの集合の内面的秩序型に收斂し、これを一目の下に直觀し得べきものたらしむる可能はこの自己完了の集合に於て初めて見られるのであつて、この點に於てこの集合のもつ内面的秩序は凡ての數系列を内面的に映じて居る直觀體系であるといへる。凡ての數系列の極限はそれ〱この集合に於ては現象學的體驗の内面的統一として一つの點の内面で結合交叉し、而もその交叉點の内面的關係の性質的區に於てそれ〱その數系列の特質を本來的に維持して居る。而してこの交叉點に於ける數列系の極限が獨立變數として現象學的時間的に移動し、交叉點の内面で一つの極限から他の極限に

移るに隨つて二つの極限の連続といふ外に、七に五を加へて十二となるときの十二に於て一つの新しい全體を見るといつたやうに全體の内面的發現によつて新しい意味を生じ、數系列の異なる意味の體系を生ずる。この點に於てこの集合の内面的秩序型は活きたるそれ自身から發動するところの創造的總合發展であるといふことが出来るであらう。

併しカントルの自己完了の集合をかくの如き内面的發展の獨立體系と考へるに於ては、なほ新しき立場の考察がその背後に豫想されて居ることを考へねばならぬ。カントルによるときは自己内稠密の集合と自己完了の集合との二つの集合の條件を併せ有せるものが完全集合であるとする。(一)つまり自己内稠密の集合であつて、數の根本系列を含むものを完全集合といふのであつて、凡ての數系列の秩序を自己の内面に收斂せる秩序型として、自己自身の體系から凡ての數系列を發展すべきものでなければならぬといふことを、この完全集合に對して要求するのであるが、これにはなほ一つの背面に於ける大きな立場が豫想されることを要する。

而してこの豫想は數の根本系列を發展するものといふ點に於て、時間を超越した空間の全體的統一であるべきことは斷る迄もない所であつて、完全集合がその官能

を積極的に發揮するについてはこの點に於て結局この集合を内面に包むところの背面の大きいものに觸れて往かねばならぬ。ヘーゲルがその著作の初めから終りに至るまでカント哲學に對して繰り返した非難は、ラスクもいつて居るやうにカント哲學では、純粹概念、無限、絶對的空虛と有限、經驗的具體との對立によつて認識界に忍ぶべからざる龜裂を生じたることであるが、もとゞ批判説はこの分裂の立場にあるものであつて、批判哲學では内容と形式との分離は必然的結果である。(二二)而してこの概念的一般と經驗的特殊との分裂を論理的に最も極端に走らせたのは恐らくリッカートであらう。

リッカートは批判説を徹底して超越的理想主義をとつた。既に述べた原子の認識を以て認識の人間に課せられたる永久のイデヤであると見、而してこのイデヤを超越的當爲と見るのは即ち是れである。隨つて氏によるときは事實といふものは特殊と見るべきものではなく、一般性の内容換言すれば内容性の形式と見るべきものであるが、(二三)批判説によるときはこの形式は結局超越的當爲と見るの外ないのであるから、氏はこの當爲の承認によつて初めて客觀的事實が可能となるといつて居る。(二四)斯ういふ考へ方によつて氏は先驗的超越的なるものを以て絶對的妥



當の規範としたのであるが、併し認識作用を超越したる對象が如何にしてこれに内在するに至るであらうか。超越的當爲が内在的となり判斷の絶對的根源方となるためには、この當爲その物を内面的に映すものが認識の根本的規定として必要なのではないか。凡ての物の徹底的規定たるべき超越的最高命題は、ラスクもいつて居るやうに凡ての賓辭をその超越的内容のまゝ自己自身の中にもつて居る、これよりも高次のものでなければならぬ。(二五)この點に於てこの超越的當爲がその當爲たる面目を維持するためには、この當爲を踏み越えてこれを内面に包むものを要するのであつて、私は西田博士が判斷が判斷自身を超越せねばならぬといはれるのも矢張これと同一の意味ではないかと思ふ。(二六)超越的當爲が内在的となるのはこの場合にかぎる。リツカートの超越的當爲には更にその背面に於てこの當爲その物を對象とするカント哲學の言葉でいふならば神 *Urwesen* の叡知的直觀を要する。この超越的當爲を内面にもつ超越的當爲全體 *das transendentiale Sollen-All* などもいふべきものを要する。

リツカートは超越的當爲は何等の現實的實在から出發するものではなく、當爲の概念上常に自己自身に於て存在し、自己自身で妥當するものでなければならぬとい

つて居るが、(七)勿論純粹當爲又は超越的當爲は凡ての現實から獨立であつて、これによつて生ぜられるものであつてはならぬ、却つてこれを生ずるものでなければならぬ。此處に純粹とか超越とかいふ性質が維持されるのである。併しこの當爲がかくその純粹性を維持し、リツカート自身のいつて居るやうに判断の彼岸にあつて凡ての否定及び疑問を超越し、而も凡ての認識の疑問のない根柢なるを得るについては、(八)この當爲それ自身が更にその背面に於て超越的當爲全體とでもいはるべきものを有し、この當爲その物を自己の内面に於て直觀し、疑問なき當爲といふことを直接的內容とするものがなければならぬ。全體の自己限定によつて初めてこの超越的當爲がそれ自身の外には何物にも依らない獨立自由の意味に於て當爲の價値を保有するを得、超越的にして而も同時的に内在的當爲として當爲の眞の意味を發揮することが出来るのである。私はかやうな點に於てリツカートの哲學には猶ほ考ふべき問題が残つて居るものと考へるが、この點は氏の *das fraglose Ja* を見れば一層明瞭であると思ふ。リツカートはこの疑問なき解答は認識の理論的主觀の概念には缺くべからざるものであるが、或る疑問に答へ隨つて一定の對象に結合せる判断の意味を有せるものではない。この *Ja* は個人的理論的自我から超個人的理

論的主觀形式を區別する最後の斷案であると論じ、(二九)而してこの超疑問的解答に對應するものとしての超疑問的當爲は眞理の最後の標準として超越的に妥當する對象界であつて、眞理を求める個人的主觀から侵害を受けることがないこと、共に、この主觀の認識し得べき對象の範圍を決定するものであるといつて居るが、(三〇)現象學的即ち意識の本質から見てこの超越的當爲が凡ての判斷内容の共通の極限として如何なる判斷にも缺くことの出来ない統一的中心であるためには、この判斷の現象學的内容を結合するものとして悟性的直觀に對する叡知的直觀の全體がなければならぬ筈である。カントが根源的直觀では直觀その物によつて直觀の對象の存在が與へられるといつたやうな、(三一)現象學的作用を超越した様相の全體がなければならぬ筈であつて、この全體の内面に包まれたるものであつて初めてリツカートの超越的當爲又は解答が現象學的に結合せられ初めて積極的に活きたる主觀の形式としてその官能を果たすことが出来るのである。リツカートの超越的當爲又は解答は純粹なる論理的のものとして即自的には承認されるが、對自的立場に於て氏の期待する如く積極的に認識論上生命を有するには更にこの當爲を内面に於て有する神の直觀とでもいふもの、全體があることを必要とする。田邊博士もいはれて居

るやうにかゝる場合に現象學が反省の立場に於て我(先驗的超越的)をもなほ個人的と考へ、更にこれを越えて我全體 Ich-All を考へようとするのは理由あることであつて、リツカートの超越的當爲又は解答はカントの超越的我を超越してこれをその内面に於て包むところの Urwesen の直觀に於てのみ解決さるべきものである。私がリツカートの思想に反對する理由の根柢はこゝにあるのであつて、リツカートの超越的當爲又は超疑問的解答も現象學的時間の範圍的に於て考へらるべきものである限り、なほその背面に於て凡ての意味で超時間的なる全體をもたねばならぬ。

然らばこの全體は如何なるものであらうか、私はこの問題について考へて後翻つて前に述べ懸けて置いた完全集合及びこの集合を内面にもつ微分の内面的構造を考へて見ようと思ふ。現象學的時間を超越せねば全體の統一的問題の考へられぬことは今述べた。

フツサールのいふ所によるときは、現象學的に見てどの體驗[今]も大きな體驗の中の一つの地平線をもつて居るが、この大きな體驗は又根源的形式の[今]をもち、純粹我の根源的地平線を作つて居る。この根源的な[今]なる世界は現象學的時間の[今]なる地平線によつて描かれたる體驗の世界とは異なる新しき性質の所與性の様相(φ)

Gegenheitsmодиであるといふことであるが、(二)我に對して我全體を考へねばならぬ哲學の立場からいふときは、我の無限の作用、現象學的體驗を結合するものとしてかゝる直覺的所與性の全體の様相がなければならぬ。現象學的時間を超越してその體驗に全體的統一を與へる叡知的空間の純粹なる様相がなければならぬ。勿論かゝる全體の様相はその超時間的直觀といふ點に於て凡てが同時に直觀されて居るものである。故に正しくカントの叡知的直觀の立場に於て全體が同時に直觀される自知自足の絶對の世界であるといつてよい。随つて其處にはこの直觀の内容が現象學的時間的に實現の根源として普遍必然的に先驗性を發揮せねばならぬといふ理由はないやうにも考へられる。併し元來直觀の特色はその自意識によつてカントもいつた如く主觀内に獨立に一切の多様を生ずるにあるが、(三)かく直觀が自ら對象を生じて超時間的に様相の全體的を作るといふことは、實は全體者が自己限定によつて最も明晰なる姿に於てヘーゲルの哲學の言葉を以ていふならば、最も一般的なる概念として最も具體的なる内容の世界を自發的に作り、一切の活動の根源を作るに外ならぬのであつて、前にいつた全體から規定された一つの形式としての最も鮮かなる個別的作用の根源はこゝにある。ライブニッツは自己規定と

いふことは神の本質に屬するといふことを單子論四七に於て言つて居るが、全體者の自らなる自己規定には各瞬間毎に凡ての活動の根源を作る創造がある。超現象學的時間の内面にある機相では絶對靜の中に絶對動をもち、無限活動の根源を藏する。現象學的體驗の内容を結合するといふことも、實はこの自己制限によつて全體者が内容を生じつゝこれを全體の立場から統一する、全體の最高階段と特殊の最高階段との創造的一致に於ていふことである。

批判哲學の概念の先驗的一般性に於ける形式と内容との分離を救ひ得るものは比量的悟性の論理に對する叡知的悟性の直觀であつて、この直觀に於て吾々は初めて形式と内容との本質的必然關係を見るを得、現象學者の考へて居るやうに體驗及び世界の間にある本質的關係の大なる世界に出ることが出来る。デ、キンツの自分の思想世界もこの大なる世界からのみ理解される。デ、キンツは既に述べたる如く數の根本體系を以て自分の思想世界と呼んだが、これは數は本來叡知的空間の様相に屬すべきものであつて、如何に客觀化しても猶ほ客觀化し切れない奥底の様相から生成せられるものであるといふ意味でなければならぬのである。數の凡ての原體系として點の内に線を含め點から線を發生するといふやうに、凡ての數系列

を發生し、これを以てその寫象とするについては、カントの先驗統覺の自我をも現象學の立場から個人的となし、これに對して我全體を承認した純直覺の立場に立ち、その直覺の内面に於て寫されたものとして數の原體系たる「自分の思想世界」を見ねばならぬ。數はこの直覺的所與性の機相の世界に發生するから、既にもいつた如く實は個性的たるを得、徹底的に最高の一般性と最高の特殊性とを併有せる個性たるを得る。この外に數の根源はない。デ、キントは前述の著述の序文の劈頭に於て、數概念は時間及び空間の直觀から全く獨立である。數概念は寧ろ思惟法則の直接的發展であると信ずる旨を述べて居るが、數が思惟法則の直接的發表として先驗性を保持するためには、この先驗性を産むものとして、數の背面に凡ての意味で直接的なる作用を超越した様相の秩序の世界がなければならぬのである。

カントルの完全集合に於ける秩序型もこの様相の世界に於てのみ理解せられる。凡ての數關係を自己の中に含み、而も根本系列に於てこれを含むところの完全集合はその背面に於てこの様相の全體を有し、その叡知的空間的秩序から現象學的時間的に數系列を發生するものでなければならぬ。カントルは既に述べたる如く數の先驗といふことをいふが、先驗のみでは完的集合は得られぬ。先驗を産み、數の論理

的 法則を産むものから、有機的必然的にこの完全集合を生ずるのである。ヘーゲルの哲學體系ほど合理主義を徹底せるものはその前後にないが、又非合理性を承認することもその右に出づる哲學説がないといふことをラスクがいつて居るが、(二四)數がこの様相に觸れる點に於て既にもいつた如く、又ヘーゲルの概念と同様に最高の階段に於て一般的存在であると同時に、又最高の階段に於て具體的であつて、最高統一の有機的體系を以て自發的に發生する。カントルの完全集合に於ける秩序型は斯くの如きものでなければならぬ。

併し論じてこゝに至るときはコーエンの *のみ* の内面に於て見らるべき數秩序の内面的構造は微分幾何學によつて考へられるよりも感覺幾何學に於て考へらるべきものであつて、現象學者が認識を以て感覺的必然的關係と見るときに體驗及びその内容の本質的關係の大なる世界に向つて進むといつたやうに、(二五)吾々も亦單子の内面的構造に於て新しき世界を見ねばならぬ。

## 九

偕、既に述べたるやうに凡ての數系列の極限を内面的に收斂して居るのが自己完



了の集合であるが、この集合が積極的に凡ての數系列に發展して根本系列の數體系を作るについては、更にその背後にある數成立の最後の根柢に觸れて來ねばならぬ。哲學上からいふときはこゝに批判哲學の一般からヘーゲルの放射的論理學への轉廻がなければならぬことは既に述べたる所である。デ、キントの數概念は思惟法則の直接的發表であるといふことも、只これを批判哲學の立場に於て解し、數概念を以て單に一般的妥當性を有するといふのみに止まるものとして見るならば、數學は全く經驗の雜多と關係のない先驗的妥當性の抽象的科學となつて仕舞はねばならぬ。かくては數學者の所謂閉合集合は考へられるかも知らぬが、開放集合は考へられず、一般に幾何學は考ふべからざる問題とならねばならぬ。眞の數學はかゝる立場の思惟ではなく、批判哲學を超越し、否、その内面に於て深くその根柢を徹底せる超合理性の放射的論理學の立場に立ち、統一の演繹の立場に立つから全體の數系列を積極的に説明し、前に述べた實函數に集合論を適應するといふよりも、實函數の内面的構造に於て集合論を見るを得、ヘーゲルの概念が最もよく非合理性の現實を規定し得るやうに、數概念が經驗的現實を規定し得べきことが明かとなる。數概念の本來では思惟法則の直接的發表でなければならぬといふことは、ヘーゲルの哲學の統

一の演繹に於ていふことであり、現象學的時間を超越した叡知的空間の全體の様相に於ていふことである。數は直覺的所與性の様相に根源をもつ。これが數概念を規定する最も重要な觀照であつて、數學の根本的假定を基礎付けるものは合理主義ではなく、非合理主義であるといふこの眞理から、直接數は創造的認識の有機的發展であるといふことが承認される。フライエンフェルスが數學的認識の創造的たるべきを論ずる際に、數學的認識は吾々人間の主觀性の生活傾向と必然的關係を以て發展するといつて居るが、(二六)數學的認識は本來吾々の眞の生命の發表であるといへよう。

數はヘーゲルの概念の如きものである。絶対我のイデヤに觸れて居るものであつて、それ自身の規定によつて内容の空虚なることを許さぬものであり、自己自身で完結し自己自身で發展するものであるといつてよい。(二七)私は前に認識論上數を以て範疇とする點に於て諸家の説に反對して自己の肯定的卑見を述べたが、ヘーゲルの概念を以て形而上學的範疇とすることが出来るならば、即ち比量的悟性ではなく、叡知的悟性の範疇であるとすることを容すならば、數はヘーゲルの數概念と同様に形而上學的範疇の立場に昂るべきものであつて、ヘーゲルの概念が最も普遍的にし

て又最も具體的なる立場に於て既に述べたる如く合理的に最も非合理性の承認を徹底せると同様に、數も亦その本來的立場に於て最も合理的に非合理性の承認を徹底する意味に於て哲學史上立派なる形而上學的範疇たるの立場を得べきものであらう。數は *das Viel* であると共に、なほその内面に於て *das Wiegross* を有する。數は時間を超越した空間に基くといふ點に於て、その内面的秩序は直覺的所與性の様相としての叡知的空間の内面的幾何學的構造を有し、凡てその有限的構造の内面的統一の極限を自己自身の中にもつて居る。これが私の世界幾何學の内面に微分幾何學を見、又この幾何學の内面に叡知的幾何學を見んとする所以であるが、勿論この叡知的幾何學の要素は點ではなく意味である。色を見て過去の記憶を臭ぐといふやうに、凡ての意識の體驗は時間の流れの中に於て本質的にそれ自身で完結せる一つの關係となつて居るが、この時の流れの中の體驗は又色や記憶を永久の現在に於て見るといふやうに、これを全體的同時的に見る事が出来る。即ち體驗の内容を結合する全體の立場、意識の流れを根源的に作る立場から見る事が出来るが、色の微分幾何學もこの全體に映されるといふ點に於て眞の内在的幾何學となり、區別性 *Unterscheidbarkeit* を要素とする内面的統一體となる。即ち感覺の幾何學となるので

ある。

微分の内面的構造に於て徹底せる直覺的所與性の様相の全體の世界では直接その内面に映されたるものは意味の内面的幾何學、感覺の幾何學であつて、その外面が即ち微分幾何學としての運動の幾何學であり、ミンコフスキーの世界幾何學としての物理的形像である。この點に於て正に *eidetische Singularität* が *falsche Individualität* であるといへる。數が範疇であるといふのはこの關係に於てあるが、併しかく考へるときは數の内面的本質は全く精神的のものでなければならぬのであつて、數が形而上學的範疇であるといふことは、その精神的本質に於て經驗の構成力を有するといふ點の承認である。

數はプラトリーのイデヤの如く直覺的所與の純粹なる様相の世界に於て、先驗的に叡知的幾何學の内面的體系として區別性の統一を作る。

微分の内面的真相はこの意味の區別性の統一である。實函數の内面に集合論を見る數學の見方を徹底すれば、數の眞面目はこの區別性の統一に達せねばならぬのであつて、この點に於て數はライブニッツが單子の内面的真相を示すために無數の *points de Vue* を以てした見解を以て直ちに自己の真相を示すものと見ることが出來

るであらう。數の内面的構造の觀察は單なる内面的構造に移らねばならぬ理由はこゝにある。

數はその内面的構造に於てライプニッツの觀點を要素とする叡知的幾何學體系の如きものであつて、その一つ一つの觀點が直接その背面にある様相の世界に映されるといふ點に於て、いはゞ一つの根本系列として叡知線を内面にもつ叡知點の如きものでなければならぬ。カントルの根本系列の考へはこの叡知點に觸れる點に於て最も完全になり、一つの觀點としてライプニッツの作られたる單子の如きものとなり得る。ライプニッツによるときは單純なる本體即ち作られたる單子の現在の状態は過去のすべての状態の結果であり、又同時にその將來を孕んで居るといふことであるが、二八これはこの叡知點から出る叡知線の上に於ていはるべきことであつて、單純なる單子もこの叡知點に根源するといふ點に於て、更にその背後にあるべき様相の世界に包まれる故に、その内面的構造が意味の幾何學となり、その構造の内面に過去の世界の凡ての状態を映じて居るのみでなく、なほ將來作るべき一切世界の状態を潜在的に映して居る。正に活きた宇宙の鏡である。併し眞に活きた宇宙の鏡として内面的に意味の幾何學をもつものは、この現象學的時間の流れの中に

ある單子ではなく、その背面にある全體的様相の單子である。凡ての單子を内面に映して居る單子である。この單子は一々の單子を觀點としてこれを自己の内面に映すところの單子であつて、その叡知的空間の内面的秩序こそ實に一切の有限的存在の秩序を發生すべき根源である。凡ての意味に於て基本的秩序型である。

單子が無數の觀點をもつことはこの秩序型の内面的要素に於ていふことであり、又單子が窓をもたぬ、屬性が内部から出て往くのもなければ、外部からは入つて來るでもないといふことも、若しくは單子の存在は只創造によるといふことも、(二九)本來は只この最高唯一の單子に於ていはるべきことである。只既にもいつた神の直觀によつて凡ての對象がそれ自身から生ずるといつた底の單子の直觀の内面的創造に於ていふことである。作られたる單子の個別化の形像はこの神としての單子の直觀に於て「永久の今」なる姿に於て全體的統一的に創造せられるものであつて、叡知點としては只一つの觀點を有するのみであるけれども、その觀點が永久現在の最高唯一の單子に映されて居るといふ點に於て、潜在的に無限の觀點の内面的系列を有して居るといへる。最後の元素としての單子の觀察は此處につきるのであつて、この最後の元素としての作られたる單子を自己の内面にもつところの最上の單

子では、この無限の觀點の内面的系列を一つの點に收斂して意味を要素とする一つの叡知的幾何學を作り、凡ての存在をその内面に映して居る。この意味に於てこの最高の神としての單子は正に名詮自稱の宇宙の活きた鏡として縦にも横にも即ち一つ／＼の單子の叡知線上に於ける連續的發展から見ても、又この發展の凡ての單子の相互關係から見ても全體の豫想調和を創るものといへる。

この觀察は文字通りにライブニッツの單子論に合つて居るものではないが、私は感覺の幾何學に於て單子の内面的構造を見んとする是迄の行論の往く手に於て、かく觀察することによつて氏の單子論のイデヤを見て往きたいのである。ライブニッツは單子の内面的差異を示すために無數の觀點を以てしたが、現象學的體驗の「今」なる瞬間に於て考へらるべき叡知點としての作られたる單子の有する觀點は潜在的には無限であるといへるであらう。併し觀點の無限といふことはこの單子を生ずる最高唯一の單子、この叡知點に於て觸れて居る直覺的所與性の様相否、觸れるといふよりもこの點の内面に於てこれを生ずるこの様相に於ていふことである。この様相はそれ自身超現象學的時間の叡知的空間の全體の統一といふ點に於て顯在的には何等の觀點をも持つて居らぬが、潜在的には凡ての觀點を生じ得べき根源であ

つて、その純粹なる様相は正に無限の觀點を包容するに足るものである。この點に於てライブニッツが神に於ては凡ての變化の細目は潜在的に在在するのみであるといつたことが徹底的に承認せられる。(三〇) 寂知點を外面的に開展したるものは作られたる單子發展であり、内面的に全體のイデヤに従つて統一したものが最高單子の寂知的空間に於てもつ寂知的幾何學的形態である。形態心理學者の Gestaltlehre も私は是れでなければならぬものと思ふ。

ビュラーは『形態知覺』中に於てヘフラーが形態知覺は關係の體得と獨立無關係なるものではないといつて居る説を承認しつゝ、内面的形態は關係の成立せぬところに成立するものではなく、關係の成立が内面的形態の成立を生ずるものであると論じ、内面的形態の成立には關係の體験がなければならぬといふ考へから、概念的にはこの體験が内面的形態に先行すると斷定して居る。(三一) 即ち關係の全體の體験が内面的形態のイデヤとしてその構成力でなければならぬといふ考へを主張するのであるが、この全體の體験は結局上に述べた様相、現象學的時間を超越せる寂知的空間の様相でなければならぬことは勿論であつて、凡ての形態の根源はこの寂知的空間に於て考へられる。觀點の意味の幾何學にあるといつてよい。これが



のみ内面である。

猶、然らばこの叡知的幾何學は如何にして作られるであらうか。以上述べたる所では様相の自己規定によることは明かであるけれども、この自己規定は如何なる形式を以て起こるか、その規定的理由はまだ明かとなつて居らぬ。随つて以上述べたるところでは、この叡知的幾何學の説明はあつたといへるかも知らぬが、規定はないと言はねばならぬ。私は次ぎにこの新問題について考へ、以て愈<sub>み</sub>の内面に徹して見ようと思ふが、この問題は自由を中心として起こる創造的統一であることは多言する迄もない所である。(續へ)

- (一) Dedekind—Was sind und Was sollen die Zahlen? s. 10 & 17
- (11) Cohen—Logik d. r. Erkenntnis, s. 129
- (12) Mathematische Annalen, 46, Cantor, Beiträge zur Begründung der transfiniten Mengenlehre, § 7 & 8
- (13) Cohen—Op. cit., s. 193—4
- (14) Hegel—Phänomenologie des Geistes, s. 22
- (15) Rickert Der Gegenstand der Erkenntnis, 4 Aufl, s. 193
- (16) Cohen—Kants Theorie der Erfahrung, s. 135
- Task—Fichtes Idealismus und die Geschichte, s. 55
- (17) Weyl—Space, Time, Matter, p. 203

- (九) Weyl—Mathematische Analyse des Raumproblems s. 46
- (一〇) Vgl. Mathematische Annalen, 46, Op. cit., s. 510
- Hahn—Theorie der reellen Funktionen, Erster Band, s. 60—61
- (一一) Mathematische Annalen, 46, s. 510
- (一二) Lask—Op. cit., s. 56—57
- (一三) Rickert—Op. cit., s. 327—'8
- (一四) ” ” s. 334
- (一五) Lask—Op. cit., s. 55, Tussen
- (一六) 西田博士 劬への『哲學概論』第百十五號、九六頁
- (一七) Rickert—Op. cit., s. 209
- (一八) ” ” s. 212
- (一九) ” ” s. 299
- (二〇) ” ” s. 301
- (二一) Kant Sinnliche Werke, I Band, (Vorländer)
- (二二) Husserl—Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, I Band, s. 165—'6
- (二三) Kant—Op. cit., s. 102
- (二四) Lask—Op. cit., s. 67
- (二五) Husserl - Op. cit., s. 204—'5
- (二六) Freireichs—Irrationalismus, s. 250

- (一七) Vgl. Kroner—Von Kant bis Hegel, I Band, s. 563
- (一八) Leibnitz—Monadology, 22
- (一九) ” ” 6 & 7
- (二〇) ” ” 38
- (三一) Böhler—Die Gestaltwahrnehmungen, I Band, s. 13—14

前稿正誤

頁	行	誤	正
一四	四	その背面	その物の背面
一九	二	意味	要素。
二二	一	豫科	豫科
三一	一三	實在	實在
三二	一四	計量的	計量的
三四	一〇	當局	當爲